

## 「心の家」をつくりたい

紀美野町立美里中学校 2年 西 智弘

僕の父は駐在所に勤務する警察官です。だから僕も、小さい頃から駐在所で暮らしています。地域の安全を守る仕事である一方、転勤が多く、僕は今まで転校を5回しました。

転校すると、まず住む場所が変わる。近所のおじいさん、おばあさんが変わる。今まで遊んでいた友達が変わる。教室が変わる。先生が変わる。帰り道が変わる。・・・当たり前だった周りの景色ががらりと変わります。環境が急に変わるということは、心の負担がとてつ大きいということを身をもって実感しました。

一番辛かったのは、小学3年生のときでした。とても大きい学校で、クラスの人数も多く、圧倒されてしまいました。僕は明るい性格でも、おしゃべり上手でもありません。自分からクラスの友達に話しかけることも苦手です。そんな僕のことを分かってくれる友達は、そこには一人もいませんでした。

僕は始業式から、心に鍵をかけてしまいました。心に鍵をかけるということは、まず笑わなくなる、何もしゃべらなくなる、顔を上げて歩かなくなるということです。

毎日が淡々と過ぎていきました。いじめられることもなく、誰ともしゃべらない毎日でした。人は誰にも相手にされない、必要とされないことが一番苦しいのではないのでしょうか。このとき「転校なんかしなければ、こんな思いをしなくてすんだのに。」と思いました。

あるとき母に、「自分が変わらなければ、人は変わってくれないよ。」と言われました。僕は「自分が変わる」ってどういうことなんだろうと考えてみました。自分から積極的に話しかけたり、みんなと明るく接し

たり。そんなにすぐに自分を変えることはできません。でも、一つだけ努力をしました。それは自分から挨拶をすることです。「おはよう。」と言うと、「おはよう。」と返してくれる。そうすると、心が少し軽くなりました。

中学校入学とともに、僕はまた新しい学校に転校しました。また心に鍵をかけてしまいそうになりましたが、今現在の僕は、一言でいうと「いい感じ」です。僕を分かってくれる、一緒に笑い合える仲間がいます。そしてこんな舞台に立ってスピーチをしている自分がいます。新しいことへの挑戦。そんな僕を応援してくれる仲間がいます。

度重なる転校で、孤独を味わいました。しかし、それは無駄ではなかった気がします。一人の寂しさを知ることができたし、少しだけ自分を変える努力ができました。

パトロールに出かける父が、僕にこんな話をしてくれました。近頃一人暮らしのお年寄りが増え、父が行くととても喜んでくれるそうです。父もおじいさんやおばあさんの笑顔を見ると、「明日もまた頑張ろう」という気持ちになるそうです。

僕に将来の目標ができました。地域の子どもやお年寄りが一緒に笑い、安心できる「心の家」をつくることです。そこには優しいおじいさんやおばあさんがいて、甘いお菓子があって、いつでも気軽に相談できる仲間がいる。苦しいときには気軽にSOSを発信できる場所です。「明日もまた頑張ろう。」と心が軽くなる、そんな「心の家」をつくりたいと思っています。